

特色ある市立学校の取り組み

市内の小・中学校では、子どもたちが心身ともに健康で人間性豊かに育つよう、各校それぞれが独自の取り組みを進めています。今号では、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を目前に、市立小・中学校が行っている取り組みを紹介します。詳しくは指導室☎470・7781へ。

パラリンピックの競技から学ぶ

市立神宝小学校では、東京都オリンピック・パラリンピック教育推進校の指定を受け、「互いの人権を尊重し合い、共に力を合わせて共生社会に生きる力」「豊かな国際感覚をもち、国際社会に貢献する力」を育成するため、積極的にオリンピック・パラリンピック教育に取り組んでいる。

神宝小学校



昨年4月、世界中の子どもたちにパラリンピックの魅力を伝えるため、国際パラリンピック委員会が開発した「I'm possible」という教材の配布に先駆け、日本版の教材を使用した授業を神宝小学校で行った。パラリンピックサポートセンターから、マセソン美季さん(1998年長野パラリンピック、アイススレッジスピードレースメダリスト)をはじめ、たくさんのスタッフの協力も得て、日本初の公開授業ということで、テレビや新聞で紹介された。この教材はパラリンピックについて学ぶ座学と、実際に競技を体験する実技がある。Impossibleは「できない」という意味だが、それに「I」を付けると、I'm possible「私はできる」という意味に変わる。つまり、小さなきっかけで人間は前向きに頑張ろうとする力をもつことができる、また、自分たちがそのきっかけをつくることのできるということ。この授業を通して、子どもたちにも分かってもらいたいと考えた。3校時、6年担任の石塚智弘主任教諭は、パラリンピックスポーツの様々なルールや用具をクイズ形式で示しながら考えさせたり、説明したりすることで、子どもたちにパラリンピックスポーツをより身近なものへと引き寄せた。4校時は体育館でシッティングバレーボールを体験した。視察に訪れていたIPC(国際パラリンピック委員会)教育委員会のニック・フラー委員長は、「東京2020大会に先駆けて、東京が世界で初めてこのような公開授業の場になったことが嬉(うれ)しい。児童の皆さんも人生における貴重な教訓が学べたと思う」と述べられた。児童は、「誰もがスポーツを楽しめる工夫があることが分かった」「これまでやったことのあるスポーツとは違う楽しみがあった」などの感想をもち、すべての人々が楽しく関与できる社会について考えることができた。



↑車椅子バスケットボールを楽しむ児童の様子。車椅子を動かしながらボールを追って、パスを回し、チャンスがあればシュートを狙います(神宝小学校)。

また、6月には、日本車椅子バスケットボール連盟と連携し、三宅克己さん(車椅子バスケットボール元日本代表)と日本代表を目指す諸岡晋之助選手(東京ファイターズ)をお招きした。パラリンピアンプレーにふれ、実際にパラリンピックスポーツを体験することで、知識だけでなく、心と体で実感することが学童期の子どもたちにとって何よりも心に残る学習となる。5、6年児童は車椅子が激しくぶつかり合う様子を間近で見て、その迫力に驚いていた。そして、三宅さんから持ってきてくれた子どもサイズの車椅子を10台使い、一人一人が車椅子に乗り、車椅子バスケットボールを体験した。

児童たちは、「難しかった。本物のアスリートはとてもすごいと思った」「車椅子を使っているけれど、私たちと同じように何でもできることが分かった」など、新しい発見をすることができた。子どもたちに人間のもつ可能性や自分の力を信じて生きる「勇気」「強い意志」を育てるとともに、今後はさらに学校や家庭、コミュニティなどの日々の生活の中でそれを実践する力を育てていきたい。(小瀬ますみ校長)

豊かな国際感覚の醸成～米国ノースカロライナとの国際交流～

昨年7月、米国コロラド大学の視察団が本校(市立南中学校)のオリンピック・パラリンピック教育を視察に訪れた。その際、1年生と3年生の2クラスの英語の授業に飛び入り参加してもらった。ユーモアあふれるアメリカ人の先生方との交流はとても盛り上がりがあった。交流できなかったクラスの子どもたちがその姿をうらやましうに見ていた。

ところが、都の調査では「外国の人がいるとき、話しかけたいと思うか」という問いに「思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた本校の生徒の割合は70%を超える。自分から進んで外国人と関わろうとする姿勢はあまり見られない。例年の傾向だ。また、世界に目を向けると、人、物、情報の国際的移動がかつてないスピードで進み、様々な分野で「国境」という壁が低くなっている。日本でも同僚や上司が外国人になる日はもう時間の問題。グローバル人材の育成は急務だ。世界は異なった価値観をもつ個性豊かな人々から成り立っている。それらを互いに理解し尊重する事が重要だ。多様性を認めることがグローバル人材の根幹といえる。

そこで、多感な中学生のうちに、海外の人たちと積極的に交流し、文化や価値観の違いについて身をもって経験できる機会を創り出していくことが必要と考えた。本校の英語科に6年間米国ノースカロライナ(以下、NCと表記)で生活していた教員がいる。その教員の人脈を駆使して、NCの学校や教員に複数アプローチしたところ、日本語の授業がある2校から交流の申し出をいただいた。そして、2学期からNCの中学・高校と手紙やビデオレターなどで交流することにした。目的は二つ。世界各国の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。そして豊かな国際感覚を醸成し、世界の多様性を理解し受け入れる力を身に付けることだ。2年生全員がNCの中学生と、2年生、3年生の希望する生徒が高校生と交流する。早速10月はじめに高校から21通の手紙が届いた。本校の生徒も修学旅行や東京遠足で、清水寺や雷門等を英語で紹介するビデオ等を作成した。今後の交流について意見交換をするため、11月に本校教員がNCに出張した際に届けてきた。近い将来、南中学校とNCの子どもたちが相互にホームステイができればと切に思う。



↑南中学校の生徒が作成したビデオレターを見る、イースト・チャペル・ヒル高校のクラスの様子(写真は現地に出張している南中学校の山下真実教諭が撮影)

また、10月末にはアメリカ大使館の日本人スタッフによる講演会を行った。中学生の時に単身、留学を決意しアメリカの高校、大学を卒業した女性職員だ。「英語は何とかなる」「アメリカは自由な国。自由だが責任を伴う」「授業では発言も大事な成績のポイント。意思表示をしっかりする」など日常生活に密着した具体的な話が、とても子どもたちには興味深かったことが生徒の感想からうかがえる。私たちは旅行や映画などを通してアメリカの生活を垣間見ることができる。しかし「いまだに侍がいると思っているなど、アメリカ人は意外なほど日本のことを知らない」と話されていた。

日本の文化や伝統を外国人にしっかりと伝えることができることもまた重要。異文化理解の基盤は自国の文化理解。昨年度から取り組んでいる日本人としての自覚と誇りの涵(かん)養をテーマとした学習の上に立って、国際交流を進めていきたい。(川上 智校長)

教育委員会 談話



宮下委員

教育委員会委員が任命されました

教育委員会委員の名取はにわ氏が、平成29年9月30日をもって退任されました。同委員は平成25年10月1日からの4年間の任期中、市の教育行政の推進に尽力されました。後任には第3回市議会定例会において、宮下英雄氏(元聖徳大大学教授、元公立小学校長)が議会の同意を得て任命されました。任期は平成29年10月1日から33年9月30日までの4年間です。

「主体的・対話的・深い学び」とチーム力
宮下 英雄

10月1日から、教育委員として就任しています。私は、教育現場一筋で今日まで歩んできました。

担任時代から始まり、指導主事、主任指導主事、指導室長、参事、校長、そして大学・大学院教授等として現在に至っています。それぞれの立場において様々な経験や体験を積み重ねてきました。誰もが体験したいと思われ嬉(うれ)しい体験もあれば、悲しい、苦しい体験もありました。しかし、両者とも今の私にとっては、先の道を考え、課題を解決する貴重な糧になっています。

その間、本市においては青少年問題協議会をはじめ、子育て支援行動計画策定、教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価、教育振興基本計画策定、授業改善研究会、小中学校一貫プロジェクト、学力ステップアップ等々の多くの事業運営に関わってきました。各委員会の皆様が多様な側面から意見交換されている姿を拝見している中で、本市の児童・生徒の健全な成長への願いと教育行政の計画的推進への情熱を強く感じることができ、この任を拝受しました。

さて、冒頭に掲げた「主体的・対話的・深い学び」という文字を見たり、耳にすることが多くなってきました。平成29年3月に公示された、新学習指導要領のスポットです。今までにない改訂が施された背景にあるのは、AI(人工知能)など、科学技術の進歩等による「21世紀の社会」が大きく変化すると予測されることにあります。

型が決まった反復、認識、手作業は、徐々に人間の手から離れていく可能性が広がります。オックスフォード大学のAI研究者のマイケル・オズボーン氏は、「20年以内に今の仕事の47%は機械が行うようになる」と言っています。人間にしかできないと思われていた仕事や、ロボットなどの機械に代わられる時代がすぐそこまで来ています。このような社会を見越し、企業では「コミュニケーション力や思考力を駆使し「チームで課題解決」ができる人材を求めています。知識の取得より、社会で使える実践力を期待するようになってきました。知識の習得や情報収集は必要ですが、大切なのはこれらを使って「どのように学び、何ができるようにするのか」です。

その結果、登場したのが「アクティブ・ラーニング」という学習・指導方法です。学習者が主体的・対話的に深い学びを通して、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続ける人材の育成を目指しています。アクティブと聞くとも身体的な活動を想起しますがさまざまな活動を通して常に頭脳を働かせることを意味しています。キーワードは、プロセス(過程)、インタラクション(相互作用)、リフレクション(ふりかえり)の3事項です。この3事項は授業改善の大切な視点で、学校経営の基本的な視点でもあり、教育行政の施策推進においても大切な視点と考えられます。子どもの成長に関わる全ての大人に期待される役割の視点で接することが大切です。それが「チーム東久留米」です。私もその一員となって、職責に努めてまいります。

教育委員会委員の細川雅代氏が、平成29年11月16日をもって退任されました。同委員は平成27年7月1日から2年4カ月あまり、市の教育行政の推進に尽力されました。

教育委員会 審議結果のお知らせ

平成29年7月3日に開催した第7回定例会から12月1日に開催した第12回定例会までに付議された議案(14件)は、すべて承認されました。議案及び報告事項の詳細については、市のホームページや市政情報コーナー等でご覧いただける議事録をご覧ください。詳しくは教育総務課庶務係☎470・7775にお問い合わせ願います。